

[『グローバル天理』第12号（通巻24号）掲載論文要旨](#)

井上昭夫 「巻頭言 アフガン難民村に土囊シェルターを」

カナダやニューメキシコには「国境なき建築者」(Builders Without Borders)というNGOが立ち上げられ、基本的人権にかかわる人間の住居提供に向けて、土囊をはじめ自然の建築素材による住居モデル作成のワークショップを実践し、技術普及の活動を始めている。これらNGOとタイアップして、アフガン難民村で人間が立つ大地の土を原料に、安価で風土・気候に適した、シェルターのモデル建築が難民の人たちと協働で実現出来ないかと考えている。

荒川善廣 「「元の理」の探究（9）—混沌からの創造〔6〕」

世界を創造した神と真の自由をもつ人間との関係を考えていく上で、ブーバーの思想(Buber's thought)と有機体の哲学(the philosophy of organism)が有用である。神と人間との関係は、相互に作用し合う関係であり、ブーバーの言う我-汝関係(I-Thou relationship)である。そのような視点から「元の理」を見ると、親神による世界創造とともに、親神自身も根本的な働き、つまり「神としての立場」から、十全の守護の理をつかさどる人格的存在、つまり「神とされる立場」へとその在り方を充実されることになったと考えられる。

宮田元 「宗教・スポーツ・教育（5）—宗教とスポーツ〔3〕」

シェーブ(Chave)は、宗教教育の目標とする精神性を高めていく上で、効果的とみられる経験の型を選び出し、この種の経験は、教会、家庭、学校、グラウンド、職場など、いつ、どこでも行うことができるものであるとした。また、この経験が展開されている限り、精神的目標は実現されつつあるとみる。これは、宗教があらゆる年齢層にわたって、すべての生活に浸透しているという観点にたつ。スポーツも、経験を通して、精神性を高めていくという方向性をもつと考えるとき、宗教と大きな接点をもってくる。

末延岑生 「ことばと教育（9）—ことばの元を探る〔8〕」

人類は、一万年にわたる知恵の仕込み、文字の仕込みを通じて、知性豊かにより人間らしく成長した。そしてこの400年の間に「科学」という学問を生み出した。その結果、我々が人間の存在と生き方を考えるに際して、あくまでも科学的に実証しようとするあまり、科学という学問の充足できる範囲内ではかひも解くことができなくなった。

科学という学問を、地球の支配者としての人間という立場にたつて次代の子供たちを啓蒙し

て行く。コペルニクスは科学的真理を暴露することで、神に対する冒瀆だと弾圧された。しかし、現代は逆に神の摂理(どんな神かが重要な問題だが)を説く者のほうが、さらし者にされる時代になってきた。まさに現代人の科学的態度は、天然自然の摂理を追い越している時代、逆想・逆転の時代であるといっていると思う。とはいえ、これは科学自体に責任があるのではなく、我々は人知を超えた天理が要求する真の科学的態度をまだ持ち得ないからである。

人間は髪の毛一本さえ造ることができないという事実を考えてみたい。私たち人間を、誰が、何を目的として創造したのか。その目的のためにどのように造られているのか。なぜそのように造られているのか。ことばの元についても然り。こうした素朴な不思議と感動の原点を探り、その結果、人が自然の中でどうあるべきかを導き出すことこそ真の科学といえるのではないか。科学はただ自然の種明かしをするだけにとどまらず、こうしたことを考えなければならない。(まだ原稿がきてません)

佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌(12) 戦前のフィリピン伝道 [10]」

フィリピン・ミンダナオ島ダバオにダバオ教会を設立した塚本義輝の生い立ちと、彼がフィリピン伝道に至る経緯について述べる。

堀内みどり 「天理異文化伝道(23) 天理教のコンゴ伝道 [22] — 2代会長時代(1967-1971) [3]」

清水会長の指導のもとに教会生活の体制が整えられた。朝勤めの後にそれぞれのその日の分担を決め、責任を果たし、報告するというものであった。コンゴ人と日本人とが二人一組となって、においがけに回った。伝道拠点となった布教所では、現地人責任者と共に日本人布教師が住み込み、教勢を伸ばし、いずれはコンゴ人が自営できることを目指した。しかし、その道程は厳しく、神観念や人生観の違いなど文化的障害が立ちはだかった。

小滝 透 「天理比較神秘論への試み(24) 仏教と教祖 [5] — 聖地と巡礼」

巡礼による聖地訪問はどの宗教にも見受けられる行事であり、かつ信者にとっては神の恩恵を享受する最大の機会である。

天理教は他の日本の宗教(とりわけ仏教)と異なって、直線的巡礼を遂行する宗教であるが、それはとりもなおさず天理教の神概念と非常に深く関係している。天理教と他の宗教との比較検討を、巡礼や聖地に関してなしてみた次第である。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（24）—赤ちゃんの心」

コミュニケーションの力を備えた者として扱われることによって、赤ちゃんの中に本当のコミュニケーションの力が形成されてゆく。だからこそわたしたちは、人として成長してゆく可能性に満ちた存在として子どもを受けとめ、子どもの示す仕種や眼差しに暖かく応えてゆかなければならない。

ところで、赤ちゃんに接するおとなたちは、世界中どこでも随分似たような反応を示すという。赤ちゃんに対しておとなは大袈裟な身振りや表情で応えるし、相槌を打ちながら、赤ちゃんの仕種や表情を無意識の内に模倣したりする。そうした定型化された行動が、赤ちゃんの存在そのものによって誘発される。そうであればこそ、赤ちゃんの側にも、自分が外の世界に変化をもたらすことができるという気づきをもたらされる。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（22）—社会福祉とジェンダー [7]

天理教は宗教界ではじめて里親会を結成して現在も養育里親を中心とした活発な活動を続けている。それを支える精神的土壌を考察しながら、里親活動の教内外における社会的意義を明らかにする。

深川治道 「エコロジカル インタビュー（11）—環境モデル都市づくりを目指す水俣市」

水俣市では、収集された資源ゴミが「水俣ブランド」と呼ばれるほどその質がよい。また、ISO14001の認証取得をただだけでなく、それを応用して家庭版ISOや学校版ISOを独自に策定し、行政・市民が協力して環境モデル都市を目指している。公害という環境破壊によって大きな打撃を受けた水俣は、今その環境を武器として町の再生を目指している。

上杉武夫 「都市の再生に向けて—アメリカ通信（19）—今、アメリカの諸都市は」

アメリカは公式に2001年3月から景気後退に入ったことを認めた。また、さる9月11日の同時多発テロ以降、世界が変わったことを認識することは重要だ。今回はネットビジネスの不調から職を失う人々の話や、ニューヨーク市長のジュリアーニ氏のこと、また長期にわたる見境のない建設工事がロサンゼルスに与えた影響などについて触れる。世界の再生に向けて、今ほど本来の人間性と能力が問われる時代はない。

特別連載：シンポジウム「天理スポーツを語る」（11）

山本義泰 「天理柔道の伝統と精神」 [1]

二代真柱 様は学生時代に柔道に親しんだことで、精神と肉体の鍛錬にスポーツが有効な手段であることを確信した。彼のスポーツ振興の根底にあるのは、他者ととも「陽気ぐらし」をするという天理教の教えだったのである。神からの借り物である肉体の自由自在の働きに感謝し、その健全な精神と肉体の涵養のために、スポーツを最大限利用することだった。